

## 天長秋田の地震と昭和新潟地震の「大河の水涸れる」

河内一男(新潟薬科大学)

### §1. はじめに

平安初期の天長七年に東北地方日本海沿岸を襲った地震には「雄物川の水涸れて溝のごとくなり」とある(宇佐美龍夫「最新版日本被害地震総覧」の地震番号013, 830 II 3(天長7I3)辰刻 出羽 M=7.0~7.5(1975年版ではM=7.4)). よく知られている記述であるが、内容が「トンデモ」ないものなので顧慮されることは少なかった。さて、西暦計算で1134年後の昭和三十九年新潟地震で、この「トンデモ」ない現象が再現し、それを目撃した人がいた。ところが、「信濃川の水が裂けた、底が割れた、小川のようになった、泥の底に魚が跳ねていた」などという驚天動地の目撃談は周りから一笑に付された。相手にされないのもその後語らなくなった。

### §2. 天長七年出羽国地震(830年)の記録

小鹿島果「日本災異史」から、その内容と出典を示す。

出羽国地大震、人多傷死〔類聚国史、日本紀略、日本後紀、大日本史、本朝地震考〕。正月二十八日出羽國驛傳奏、今月三日辰刻、大地震動、響如雷霆(中略)城辺大河曰秋田河水涸細流如溝、添川今玉川霸川未詳闌岸崩塞其水汜濫〔類聚国史、日本後紀〕

問題の部分の読み下しは「城の辺りに秋田河という大河あり。水涸れ、細流溝の如し」となる。

### §3. 前田忠三氏と渡部薫氏の証言

1964年新潟地震の後、三十数年を経過した1999年7月に、地震当時北陸地建引済会に勤務していた前田忠三氏から落橋の様子を詳しく聞く機会を得た。またその後、手記をいただいた。

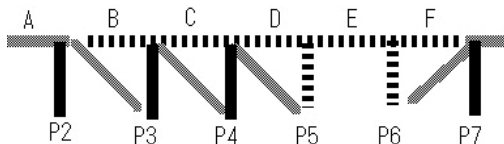


図1. 上流から下流方向を見た図。橋桁はKまで、橋脚はP11までである。P5とP6が沈下し、Eの上で川底を見た二人はE~Bが落下する前にAへ脱出した。

34回大会で落橋の様子を説明した図を再掲した(図1)。本論では前田氏を通じた当時の同行者の当時国鉄勤務の渡部薫氏の証言(手記)を紹介する。『ギ、ギギの音を聞きながら急ぎ足でペダルを踏んで

いた時、突然、自転車とともに横滑りした感じで真横の車道の端まで10メートル余りも飛ばされ何が起きたのか一瞬わからん状態だった。高欄につかまり激しい揺れの中で川の下流側八千代橋方面を眺めていた。前田さんが、体育館が潰れると叫んだ後キノコ雲が見えボンと音がした直後、自分は「川の水がないぞー」「川底が見えたぞー」と続けて叫んだ。それは逃げる直前のほんの一瞬で「オッ、ワーツ」と言う感じで1~2秒の出来事だった。兩岸に水が別れた感じだった。水が両側に避けたというか、われた、別れた感じで、下の方まで裂けた感じで下流側50メートル位までの川底の泥が見え下流側で水柱も上がった。当日、職場に帰って話したら皆が「ばか言え、目の錯覚だよ。そんなことあるわけないよ」といわれ「そうかなあ」と思い、以後は誰にも話さなかった』

### §4. 高島忠男氏の証言

地震時右岸側下流川岸にある自動車整備工場(図1のP11の下流側)に勤務していた。以下は新潟日報2014.6.12「新潟地震50年 記憶未来へ」より抜粋。『地震が起きた時、工場にいた。揺れとともに外に飛び出し、川岸に積まれていた高さ2メートルほどの砂利山に登った。足元から水が噴き出て、両足が砂利とともに沈んだからだ。ほぼ同時に、ゲーツと低い音が腹に響いた。振り返ると、昭和大桥の橋脚の一つが川に潜るように消えた。上に渡されてあった橋桁は一瞬、宙に浮いてとどまっているように見えたが、すぐに真下に落ちた。橋に目がくぎ付けになっている間に、信濃川の水がだんだん引いて小川のようになった。むき出しになった川床では魚が跳ねた。同僚や知人に話したが誰も信じてくれなかった。「笑い話になるなら、被災した人に申し訳ない」といつしか話題にするのもやめた』

### §5. 変動の証拠は地形に残らない

地震動がもたらす地面の変動のようすは計測が困難である。さらに、変形が震動後に保存されない場合が少なくない。目の前の木造の校舎が膨らんだり縮んだりしたが、揺れがおさまったら元の姿に戻ったという報告もある。目撃談は重要な「証拠」なのだ。これまでも「人智の及ばない」ことを初めて知っては対処療法を繰り返してきた。本論のような現象を検証することは、地震国のインフラや建造物のありかたを考える上で重要だ。他に見過ごしているものはないだろうか。